

## 「その悲しみは喜びに」

ヨハネによる福音書 16:16-24

ヨハネによる福音書の14章から16章は、十字架の死を前にした主イエスの「訣別の説教」です。イエスさまは、いよいよ明日の朝には十字架にかけられるという最後の夜、弟子たちと「最後の晩餐」をされ、その場で弟子たちの足を洗い、そして弟子たちに長い別れの言葉を語られたのです。今日の聖書の箇所は、そのイエスさまの「訣別の説教」の最後の部分です。

この16章16節以下でイエスさまは、「しばらくすると、あなたがたはもうわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる」と言われました。すると、弟子たちのある者が互いに言ったのです。「『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくするとわたしを見るようになる』とか、『父のもとに行く』とか言っておられるのは、何のことだろう。」また、こうも言ったのです。「『しばらくすると』と言っておられるのは、何のことだろう。何を話しておられるのか分からない。」(18節)。そこでイエスさまは、彼らが尋ねたがっているのを知って言われたのです。「『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる』と、わたしが言ったことについて、論じ合っているのか。」(19節)。

大変ややこしく、くどい描写がなされています。ここにはなんと「しばらくすると」という言葉が7回も繰り返して使われているのです。ここでの「しばらく」という言葉は、「もうじき」という短い期間をさす言葉です。ヨハネ福音書の記者は、この「しばらくすると」という言葉を何度も繰り返すことで、一体何を意図したのでしょうか。

この背後には、このヨハネ福音書が書かれた時代の教会の事情が反映されているように思われます。この福音書が書かれた時代、ユダヤの国はローマ帝国の支配下であって、人々は貧困と重圧にあえぎ、教会は激しい迫害の嵐の中にもありました。さらに、それに加えて、ユダヤ人たちからも排斥され、会堂を追われ、行き場を失ったような孤立した状況にもありました。そういう中で、キリスト者たちはひたすら、終末における神の国の到来を待ち望んでいたのです。近い将来、イエス・キリストが再び天から下って来て、正しくこの世を裁き、神の国を実現してくださると。しかし、いつまでたっても、キリストの再臨の兆しが見えず、多くの信徒たちが、深い失意の中にもありました。

そういう中で、ヨハネ福音書の記者は、「神の国は近い。否、神さまの支配はすでに始まっている。イエスさまは既にこの世に来られ、十字架にかけられたが死んで復活され、聖霊によって今も私たちと共にいてくださる。そのことによって、神の国、神さまの支配はすでに実現しているのだ」と、これまでの未来に対する終末の期待を、現在の、既にキリストによって与えられている恵みに向けさせる必要を感じたのでしょうか。

たしかに、聖書の中には、キリストの再臨の約束や、神の国の到来を待ち望めという、未来に対する終末の希望が語られていますが、この未来に対する期待は、現在すでにイエス・キリストがこの世に来られてみ業を成し遂げ、すでに勝利して私たちと共におられる、という信仰の確信に基づいていなければ虚しいのです。世にある教会は、この「すでに」と「未だ」という中間時にあって、主のみ業に参加する「神の民」なのです。

ヨハネ福音書の記者は、大きな苦難の中で、ただ未来にのみ期待し、目の前の現実から逃避しているような当時の教会の中で、イエス・キリストはこの世の苦難を担って十字架におかかりになられたが、死んで甦り、勝利者として今すでに、私たちと共にいてくださるという、現在すでに与えられている救いの恵みを強調する必要を強く感じたのです。

「しばらくすると、あなたがたはもうわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる」。ヨハネ福音書の記者は、イエスさまの別れの言葉の中に、あえてこの「しばらくすると」という言葉を何度も繰り返すことによって、間近に迫った主イエスの十字架の死は、永遠の別れではなく、神さまの救いの御業が成し遂げられ、弟子たちとの新しい出会いの始まりである、ということ強調したかったのだと思います。

「しばらくすると、あなたがたはもうわたしを見なくなる」。イエスさまはこの言葉で、身近に迫った十字架の死が、どんなに弟子たちに大きな失意と悲しみを与えることになるかを察し、予告されました。しかし、「またしばらくすると、わたしを見るようになる」という言葉で、イエスさまは死んで3日目には復活して、弟子たちに出会われるということと共に、天に帰られた後、弟子たちに聖霊をくだし、常に彼らと共にいるということを示されたのです。

イエスさまは、これまでもこの別れの説教の中で、何度も「わたしは去っていくが、また戻ってくる」(14:28)と言われました。14章18節では「わたしはあなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻ってくる」とも言われました。しかし、未だに弟子たちはそのことの意味を理解することができなかつたのです。今日の箇所でも、弟子たちが互いに「『しばらくすると』と言っておられるのは、何のことだろう。何を話しておられるのかわからない」(18節)と論じ合ったことが記されています。

救い主イエス・キリストの十字架の死と復活、さらにその後の昇天と聖霊の降臨ということは、ただ聞いただけで、理解できるようなことではありません。聖霊の導きにより、活ける主イエス・キリストとの出会いを通して、はじめて理解できることです。

弟子たちの心は、イエスさまは、一体どこへ行ってしまふのだろう、残された自分たちは一体どうなってしまうのだろう、という恐れと不安で一杯だったのです。そういう弟子たちの様子を察して、イエスさまは20節で、「はっきり言っておく、あなたがたは泣いて悲嘆にくれるが、世は喜ぶ。あなたがたは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる」と言われました。イエスさまの十字架の死は、悲しむ者と喜ぶ者とをはっきり二つに分けるのです。この世と弟子たちの違いです。この世を代表する人々は、祭司長・長老・律法学者で

あり、彼らに扇動され「イエスを十字架につけよ」と叫んだ人々です。彼らの喜びは、邪魔者を殺して、自分の欲望を満足させることです。しかし、主イエスを慕い、その教えに従って歩みを共にしてきた弟子たちにとっては、まさに悲嘆にくれるような悲しみでした。しかし、「その悲しみは喜びに変わる」というのです。この喜びは、勿論、この世の喜びとは違います。復活の主と出会い、聖霊によって主が弟子たちの内に宿り、新しい命にあずかるという喜びです。

イエスさまは、その弟子たちの悲しみ苦しみが喜びに変わる変化を、女の人の出産に譬えて、このように述べています。21 節「**女は子供を産むとき、苦しむものだ。自分の時が来たからである。しかし子供が生まれると、一人の人間が世に生まれ出た喜びのために、もはやその苦痛を思い出さない**」。「生みの苦しみ」とはよく言ったものです。イエスさまは、弟子たちがご自分の十字架の死によって、どれほど深く傷つき、失意と悲しみに落ち込むことになるか、深く思いやりながら、その苦しきは、弟子たちが新たに生まれ変わるために通らなければならない道であることを示されたのです。

22 節にはこう述べられています。「**ところで、今はあなたがたも、悲しんでいる。しかし、わたしは再びあなたがたと会い、あなたがたは心から喜ぶことになる。その喜びをあなたがたから奪う者はいない。**」

私が洗礼を受けた母教会に、弓削達という大学の先生がおられました。晩年にはフェリス女学院の院長を務められた方で、教会で大変お世話になった方です。この方が教会のある集まりで、こんなことを話されたことを思い出します。「我々キリスト者にとっては、底抜けの悲しみはないと同じように、底抜けの喜びもないのではないかと。しばらくその意味が分かりませんでした。後になって私は、その言葉をこのように理解しました。「どんなに深い悲しみや苦しみに遭っても、イエスさまの十字架の苦しみや悲しみを思えば耐えられる。また、どんなに大きな喜びの中にあっても、復活された主がいつも共にいてくださることに勝る喜びはない」と。

毎日、ロシア軍によるウクライナ爆撃の様子がニュースに流れ、心を痛めておりますが、中でも、産婦人科の病院が爆撃を受け、多くの母と子の命が奪われた場面に心が凍るような思いがしました。新しい命の誕生という最も喜ばしい希望に満ちた出産の場が、修羅場と化して、泣き叫ぶ母親と血まみれの新生児の姿に、改めて戦争の悲惨さを思い、一日も早い戦争の終結を祈られました。その映像を見ながら私は、広島に原爆が投下された時、瓦礫と化した廃墟の地下で、赤ん坊が生まれたことをうたった栗原貞子という詩人の「生ましめんかな」という詩を思い起こしました。

「こわれたビルディングの地下室の夜だった。 / 原子爆弾の負傷者たちは / ローソク一本ない暗い地下室を / うずめて、いっぱいだった。 / 生ぐさい血の匂い、死臭。 / 汗くさい人いきれ、うめきごえ / その中から不思議な声が聞こえて来た。 / 「赤ん坊が生まれる」と言うのだ。 / この地獄のような地下室で / 今、若い女が産気づいてい

るのだ。 / マッチ一本ない暗がり / どうしたらいいのだろう / 人々は自分の痛みを忘れて気づかった。 / と、「私が産婆です。わたしが生まれませしょう」と言ったのは、 / さっきまでうめいていた重傷者だ。 / かくて暗がりの地獄の底で / 新しい生命は生まれた / かくて あかつきを待たず 産婆は血まみれのまま死んだ。 / 生まれめんかな / 生まれめんかな / 己が命 捨つとも。」

私は、改めてこの詩を読み返して、自ら傷つき血まみれになりながら「生まれめんかな 生まれめんかな 己が命すつとも」と命をかけて、新しい命を生ましめたこの助産婦の姿に、十字架に赴かれたイエスさまの姿を見るような思いがしました。イエスさまは、あとに残される弟子たちに、そして私たちに新しい命を与えるために、すべての悲しみ苦しみを担われたのです。弟子たちの「生みの苦しみ」は、主が担われたことによって、その悲しみが、大きな喜びに変えられたのです。イエスさまは今も、悲しんでいる人々の悲しみ、苦しんでいる人々の苦しみを担って、共に悲しみ苦しんでおられるのです。

十字架の死を前にしたイエスさまの「別れの説教」の最後は、このような言葉で結ばれています。 **33 節「これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」** 私たちの悲しみ・苦しみを担い、十字架の上で尊い命を献げられた主は、死に勝利されて、聖霊によって、いつも私たちと共にいてくださるのです。私たちは悩み多きこの世にあって、勝利者であられる主が常に私たちと共におられることを信じ、喜びと希望をもって、悲しみを乗り越え、苦難に打ち勝って、少しでも他者のために仕え、平和を造り出していくものでありたいと願います。 アーメン